
「ものがたり」芸とジェンダー
——田辺いちかと桂^{によう}二葉

松浦正孝

2024年11月30日昼。気温16度前後。快晴の新湘南バイパスの茅ヶ崎付近にさしかかると、清冽な空気の向こうから堂々たる富士山が乗り出してきた。午後1時のニュースが終わったラジオから、「NEXT 名人寄席」が聞こえてくる。しばらくそのままにしていると、透明感溢れる凛として流麗な女性の声が朗々と語る剣術修業の話が流れ始めた。知らぬ間に、ふだんは助手席で寝ている大学生の次男も、後部座席でパソコンを叩いている理系の長男も、運転席の私も、息を詰めてラジオから流れる物語に、一言も聞き漏らすまいと背筋を伸ばしてじっと聞き入っていた。

「よかったね」。一通り聞き終わると、少しの時間を置いて、誰からともなく声が出た。素直にうなずいた。若者二人ともども、昔からの伝統芸能に聞き惚れるということは、これまでなかった。その声と語りだけに、ストーリーと心意気に。

講談師田辺いちか（以下、敬愛する芸人さんにも敬称略で失礼する）。演目は「井伊直人」。「仙台の鬼夫婦」としても知られ多くの講談師が演じている有名な読み物である。伊達家剣術師範役の夫に剣術修業を積みせる薙刀の名人で、才色兼備の猛妻の物語だ。今どきのポリティカル・

コレクトネスからすれば、埃だらけの古色蒼然とした創作話である。

しかし、男子三人、その講談のとりこになった。以後、ネットでこの演目と、田辺いちかの出ている動画を聞き漁った。そして、ネットで講談の魅力を発信している講談師神田伯山の You Tube にたどり着き、ネットで拾える限りの一通りの講談はほとんどすべて聞き通した。その流れで、講談会、落語会にも行くようになった。

歴史の場面における講談・落語・浪曲

私の専門は、日本政治史という近現代の歴史を扱う科目である。

歴史家磯田道史によれば、慶應義塾塾長で当時の皇太子の教育係を務めた小泉信三や首相吉田茂は古今亭志ん生を最員にし、自宅に招いていたという（磯田『日本史の内幕』中央公論新社、2017、159）。大磯における吉田の隣人で、私が研究のライフワークの対象とする三井銀行・三井合名の大番頭たる池田成彬もまた、1930年5月7日、自宅にフランス大使安達峰一郎や、当時外務事務次官だった吉田茂らを客として招き、フランス料理を饗しながら二代目大島伯鶴の講談を聴く会を催した。また、多くの要人を自宅に招いた会合でも、毎年のように伯鶴の講談を賓客へのもてなしとして提供している。次男潔の結婚式と披露宴の間にも、二百名近い賓客に伯鶴の講談が出し物として供された。残念ながら、謹厳な池田の日記に落語家は出てこない。

池田がもう一つ好んだのが浪花節である。ミッドウェー海戦直前の1942年、池田は元蔵相の賀屋興宣に招かれて二日続けて東宝劇場に浪花節大会を聞きに行き、吉田奈良丸、広沢虎蔵、春日井梅鶯、梅中軒鶯童らの芸を堪能した。翌年の自らの喜寿の晩餐会にもゲストとして浪曲師を呼び、その後また賀屋に招かれて東京劇場に浪曲を聴きに行った。さらに学徒出陣が始まって1年半後の12月6日の池田の日記には、「五時

東條首相に招かれて総理官邸に赴き枢密院同僚と共に晩餐の饗に預る映画ニュースの外に浪花節人形使等余興沢山にして時局不適當の宴会なり 八時四十分帰宅」というような記事もある（以上、山形県立図書館所蔵「池田成彬日記」1927年10月12日、1928年4月19日、1930年9月18日、1932年10月24日、1934年4月11日、1936年10月21日、1942年5月29日・30日、1943年3月3日、5月28日）。

このうち、大島伯鶴の音声は録音状態が悪いものの、今もCDで聞ける（「越の海勇蔵／出世相撲」や「高野長英」、連続物「寛永三馬術」のいくつかなど）。近現代史を学ぶ者としてはありがたく貴重な音源でもある。

少なくとも戦後しばらくまでは、政財界の要人や富豪が講談や浪曲、落語などの芸人を自宅や別荘に招くことがしばしば行われており、それが政治や経済に不可欠な社交の場面に使われていた。歴史の息遣いを知るためには、文字史料だけでなく、茶会、書画骨董の品評会、将棋、一流料亭の板前（そのまま自宅の料理人にする富豪もあった）を招いての天ぷらや中華料理・フランス料理を馳走する会など、少しでも時代の雰囲気接近することが必要だと思う。研究者としての駆け出し時代、斎藤隆夫除名の際の衆議院議長小山松壽の長女千鶴子さんは、歴史を学ぶのに必要でしょうと言って、三人の先輩と共に自宅近くの豪華な歴史的料亭に招いてくださった。その温情は今でも忘れられない。

さて、ここまでお読みいただいた方はすでにお気づきのことと思うが、私はまだ落語や講談のファン歴を始めて一年足らずの初心者である。寄席などに行けば、一見して「通」とわかる意地悪そうな年配者が辺りを睥睨し、中には幕間に「師匠」などお互いを呼び合って芸人や演目の批評をする集団もある。芸人たちも半ば冗談でそうした客を「嫌なジジイ」呼ばわりすることがあるが、内心おどおどしている初心者の

私も、自分も知らないうちに「嫌なジジイ」に見えているのではないかという不安から、無理にひとりで微笑を作ってみたりして落ち着かない。「私、落語聴きに来たのは二回目だね、一回目は……誰のだったか……忘れちゃった」などと隣から気さくに話しかけてくださる年配の女性にホッとすることもある。寄席や高座に初心者が一で行くのは、意外と緊張するものである。

大学関係者にはこうしたサブカルチャーに通じている教員も多い。そういえば、学生時代は落研に在籍していた強者もあれば、落語の本編に入らず延々とまくらが続く名人の話を研究発表の初めに長々とする先生もいた（この人たちと仲が悪いわけではありません。念のため）。講談師に自ら弟子入りし、屋号や名前を持っていて定期的に高座に上がる歴史家もある（この方と面識はありません）。しかし私は知識も経験も鑑賞力もない、ただの初心者である。ここから書くことは、そんな生半可な素人追っかけの「個人の感想」なので、軽く読み流して頂ければありがたい。

以下、講談の田辺いちかと上方落語の桂^{によう}二葉を取り上げて、「ものがたり」を話芸として語ること、男性の芸能として仕立てられてきた講談・落語を女性が演じることの意味について書いてみる。

講談ことはじめ

講談を演じることを「読む」という。講談の起源は慶長年間（1596～1615年）、僧赤松法印が徳川家康に『太平記』『源平盛衰記』などの軍記物を聞かせたこととされ（「サザエさんをさがして 講談」『朝日新聞be』2025.7.26）、江戸時代に辻講釈として広まったという。「読む」というのは、講釈師（講談師）が釈台と呼ばれる机の上に台本を置いて読み聞かせたことに由来する。私が初めて講談会に行った田辺^{いちゆう}一邑一門の

「講談聖夜」では、いちかの師である一邑がイギリスの実話に題材を取った「灯台守の娘 グレース・ダーリン」を読みながら、灯台のコピー写真などを客席に示しながら説明していた。まるで研究報告のようだと思った。もっとも、一邑は温かく気さくで緩く自由な人柄で知られており、弟子たちからとても大事に愛されている彼女ならではの芸風かも知れない。

講談に行くようになって一番驚いたのが、講談師と客との距離の近さだ。多くの講談会では終演後に演者が客をお見送りしてくれるので、感想を伝えたり写真を撮ったりすることができる。みぞれ交じりの冬、大磯の鳴立庵へいちかの独演会に行った時は、客が十人前後しかいなかった。少し早めに会場に到着した私に気づきたいちかが「あら」と話しかけてきて、「これまで聞いた演目は何ですか」と聞き、「では今日は重ならないようにしましょうね」と考えてくれた。来年秋に二つ目から真打に昇進することが決まっているいちかのチケットは、東京では満席となつて取れないことも多い。深々と寒さが降り積もる屋外の気配が気にならない、温かく贅沢な一席だった。

小さい頃から古本屋や図書館通いが好きで、主役に抜擢された学芸会の楽しさから自然と演劇部にも入ったといういちかは、京都府立大学で万葉集などの日本文学を学んだ。卒業論文の製作にいそしんだいちかには、すでに講談師となるべき片鱗を示した興味深いエピソードがある。原稿を読んだ指導教員から、物語としては面白いがこれでは論文とは言えないと叱られたというのである。講談と文学・歴史との違いである。

私は、歴史研究とは潮干狩りのようなものだと思う。時という潮が引くと、さまざまな貝や小魚などの海辺の生物が少しずつ顔を出している。それを幼子のように無心に集めて、自分なりのストーリーを思い描いては標本をつくる。司馬遼太郎のような奔放な想像力は必要なく、事

実や事象をつないでいる糸をタテ、ヨコに見つけていくのである。そこに研究者の価値観やある種の前提・バイアスが入ることはもちろん排除できないが、見つけた事実から外れることはできない。そこから拾った糸のラインが、それまで見たことのない、眩く翳りのない耀きを放つ時、「おもしろい」歴史が書けたとを感じる。

いちかは忘れたいこともあって、日本語教師として中国の長安大学で一年間働き、帰国すると演劇の道に進んだ。自分なりの方向性を探して、ストリップ小屋の踊り子の舞台や楽屋にも通いつめたという。声優として洋画の吹替えなどもした彼女は、その後、ある演劇ワークショップで、その後師匠となる一邑と出会った。歴史を一人で演ずることのできる話芸の深さ、表現スキルに感動し、また「この人の介護、看取りまでしたい」と思えるその人柄に惚れ込んで弟子入りした。

講談でも落語でも、高座通いを重ねるうちにこれは面白いと感じるようになったのが、同じ出し物でも、芸の感じ方が回ごとに全く違うことだ。演者の体調や気分もあろうし、会場の客の「乗り」も大きく関係するのだろう。ことに客の空気は、演者のその日の芸に大きく影響するし、それが客に伝わって新たな熱気呼び、さらにまたそれに演者が反応して客席と一体となる。その結果、スポーツでいうところの「ゾーン」や、心理学における「フロー」と呼ばれるようなパフォーマンスを成し遂げてしまうことがあるように思う。精進を重ねてきた演者が、ある時、それまでとは全く違った芸域に達したように感じられることもある。そうした瞬間に立ち会えるのは、演芸のオーディエンスにとって至福の経験である。

真打昇進を一年後に控えたいちかの2025年9月27日、人形町での独演会で演じられた三席のうち、特に「難波戦記 木村長門守重成の最後」と「玉川上水の由来」は、正にそんな時間であった。何ものかが下りて

きていると思った。その日その時、その場所だけの一期一会に立ち会える瞬間、これが演芸の一つの醍醐味なのだと実感した。

読む講談というスキル

ここでおもしろいのは、女性の講談師に声優・俳優出身者が多いことである。『宇宙戦艦ヤマト』の森雪を始めとする数々の名作の出演で知られる麻上洋子（一龍齋春水）、『ちびまる子ちゃん』のお母さんや『クレヨンしんちゃん』のマサオくん、『忍たま乱太郎』のしんべエ、NHK『あさイチ』の「あんまんちゃん」などで誰もが声を聞いたことがある鈴木みえ（一龍齋貞友）、「お風呂が沸きました」の機械音声でも有名な一龍齋貞弥など、枚挙にいとまがない。

ちなみに、落語家が声優を兼ねたことはあるが（例えば、アメリカ・アニメ『ドラ猫大将』で共演した立川談志と三遊亭圓歌、『タッチ』の九代目林家正蔵、『平成狸合戦ぽんぽこ』の五代目柳家小さん・桂米朝・五代目桂文枝・古今亭志ん朝・林家正蔵など）、声優としての活動の方に軸足を置いている会一太郎（三遊亭一太郎、六代目三遊亭円楽の長男）を例外として、声優が落語家になったという事例はあまり知られていない（なかむら治彦「落語好きの諸般の事情」#23、2018.2.24、<https://note.com/owariyahajime/n/nd42240e1a241> 2025.8.11閲覧）。しかしちょっと調べてみると、声優ではなく俳優なら、三代目桂さずめとなったベテラン俳優三林京子を始め、沖縄出身の朝ドラ俳優だった金原亭杏寿（川満彩杏）、舞台俳優出身のかはづ亭みなみ（三納みなみ）と、最近では落語家となる女性俳優も増えているようである。

ただし、講談では声色使いは邪道のようなものである。実際、声色の使い分けが強過ぎる演者の場合、初めはそれに興が乗っても、次第に想像の邪魔になって読み物に入りきれないという経験をしたこともある。

講談のスキルとして不可欠なのは、リズム感、間、声の張りともリハリではないだろうか。釈台と呼ばれる客席との間に置かれた一種の文机を、講師が各自作る張り扇おうぎで区切りごとに叩いてリズムをとるのが、講談の特徴である。前座はまだ客が揃わぬうちから「開口一番」として、三方ヶ原軍記という基本中の基本をリズムカルに読む修業をする。そうすることで、腹から声を出す方法を身につけ、講談独特のリズム感・テンポ・調子を体に刻むのだという。何度か講談会で前座の「修羅場読み」を聞くうちに、講談初心者にもそうしたイロハがわかってきて、辛い修業も多いであろう前座さんが苦戦しながら読んでいるのを見ると、「ガンバレ！」と呼びかけたくなる。

「芸人きれいごと」

いちかは、「芸人きれいごと」という言葉を紹介してくれた。理不尽なことの多い世の中で、せめて芸の世界だけでも、講談を聞きに来てくれる間だけでも、きれいな話を聞いて心地よくなって帰ってほしい、ということだそう。講談には大きく分けて「軍談」「御記録物」「世話物」の三種類があり、「世話物」の中には、怪談物や侠客物、白浪（どろぼう）物、武芸物、裁判物などがあるという。怪談物などにも挑戦しているいちかだが、特に好んで演ずるのは、戦国武将や江戸時代の武家の心意気・漢気・友情、夫婦愛、女気などを扱ったものと、動物との結びつきを描く動物物のお見受けする。動物好きのいちかには、「維納の辻音楽師」の老犬トライエル（私は三度堪能した）、「愛宕山 梅花の誉れ」の馬、「踊り場の由来」の猫といった十八番がある。毎回、その丸い眼がこぼれ落ちるのではないかと心配になる、動物になりきっての熱演であるが、その完成度の高さは俳優出身ということによるものだけではないだろう。



講談師 田辺いちか（田辺いちか 提供）

新宿の「講談聖夜」でいちかとの写真を撮ってくれた神田伊織は一邑門下ではないが、東大仏文科の大学院出身という変わり種である。当日は、「レ・ミゼラブル」第一幕のジャン・バルジャンとミリエル司教を講談で見事に演じていた。彼は実に幅広いジャンルに題材をとる一方で、マジック講談をしばしば行い、れいわ新選組の応援演説かたがた「山本太郎ヒストリー」なる講談をするなど、政治を含む様々な活動をしている。

彼の師の神田香織が、2001年の参議院議員通常選挙に福島選挙区から無所属・社民党推薦で立候補したことの影響もあるかも知れない。また、田辺一邑の師田辺一鶴の門下である田辺鶴英は、実母・義父母・義叔母・夫の介護をしてきた経験を踏まえた介護講談で知られ、その苦しみとケアの奥深さを伝えている。大衆に事件を伝える役割も担っていた講談が、政治・社会に対する強いメッセージ性を持つ物語を伝えようとするのは、自然なことなのだろう。

「講釈師見て来たような嘘をつき」という有名な川柳がある。講談で読まれる物語はほとんど史実から離れているし、講談が歴史を通じて伝えようとするメッセージは、歴史家のそれとは違ったものである。講談とは直接関係ないが、歌人俵万智は、その第三歌集のあとがきで歌についてこう記している。これは講談の「ほんとう」に通じるものだと思

う。

恋の歌については、「ほんとうにあったことなんですか？」という
ことを、しばしば聞かれる。歌が生まれるきっかけやヒントになる人
は、決して架空の人物ではない。が、この歌集を読んで、思いっきり
思い当たる人もいれば、まったく身に覚えのない人も、いるだろう。
そのまんまやないかと思う人もいれば、なんでこうなるの？と思う人
もいるはずだ。

つまりそういうことで、確かに「ほんとう」と言えるのは、私の心
が感じたという部分に限られる。その「ほんとう」を伝えるための
「うそ」は、とことんつく。短歌は、^{できごと}事実を記す日記ではなく、^{こころ}真実
を届ける手紙で、ありたい。

(俵万智『チョコレート革命』河出書房新社、1997、164-165)

歴史とは、確かな^{できごと}事実を誠実にバランスよく読み込むことで心象に形
成されるイメージを、^{ストーリー}物語として描く作業だと私は考えている。以前、
日本を代表すると言っても過言ではない素晴らしい人格の科学者の方と
お話する機会があったが、歴史の真実は一つしかないと主張するその方
との議論は、最後まで平行線をたどった。歴史は、ただ年表や事実を並
べればよいわけではない。どのように事実を取捨選択するのか、その事
実はどのような記憶や認識や文脈・経緯に支えられているのか。「いじ
め」事件でも、いじめた側、いじめられた側には、異なる認識・記憶・
背景がある。それぞれを多角的に理解した上で、多面性ある構造の中に
どうバランスよく位置付け評価するのか。まず事実の記録と見なされて
いる史料を渉猟・分析・操作し評価するところから始める。そして、そ
れらから何を拾って物語をどう組み立て組み合わせるかを考えつつ、必

要な史料や背景をさらに探って肉付け、広さと奥行きを持つ物語を描いていく。誤解を恐れずに言えば、その上で大事なものは、面白いこと、つまりオリジナリティと新しさを持ち、読み手に物語へのある種の納得と共感とを持ってもらえることである。

その意味で、歴史は、講談の伝えるフィクションとしての心意気や志、夢とは別物である（講談ではないが、漢文脈の叙情的な文体に乗せて、歴史上の英雄豪傑たちの夢を草莽の志士やその卵に届けた歴史家頼山陽について、島田英明『歴史と永遠 江戸後期の思想水脈』岩波書店、2018、特に第三章を読んでいただきたい）。講談会が終わり、時に胸を熱くして、時に清々しい気持ちになって家路につく時、いつも私は、歴史家の書く歴史とは何だろうと考える。

リアルを演じる落語

ひるがえって落語は、読む、あるいはメッセージを伝える話芸ではない。リアルを演じる話芸だと思う。

落語については造詣の深い方々が限りなくおられるのでますます憚られるのだが、ここでは神田伯山の You Tube や2025年2月9日の TBS テレビ系「情熱大陸」で初めて知って以来、その独特な世界の虜になっている上方落語家の桂二葉に関して、そのことを書きたい。

戦後、上方落語も、講談同様、一時は存続が危ぶまれたという。焼土と化した大阪に、唯一の寄席小屋である戎橋松竹が1947年に建てられたものの、「大阪の漫才、東京の落語」と言われる漫才に押されて上方落語は衰退し、1957年には戎橋松竹も閉館した。この時設立された上方落語協会がわずか18人であったのをもちこたえ、上方落語の復活を遂げたのは、六代目笑福亭松鶴・三代目桂米朝・三代目桂春団治・五代目桂文枝の上方落語四天王と呼ばれる噺家を中心とする奮闘の賜物だったとい

う（『歴史人』桂沙綾「桂紗綾の歴史・寄席あつめ 第3回戦争と演芸界③」<https://www.rekishijin.com/13147> 2025.8.12閲覧）。2006年には悲願だった365日開催の寄席小屋、天満天神繁昌亭が開設され、2018年、神戸新開地・喜楽館も開かれるなど、上方落語は再び盛んになっている。そうした上方落語の中堅・若手の旗手として、聞き手を増やし上方落語を発展させるために、若手を売り出す「深夜落語」を主宰するなど、今後の上方落語を担おうとしている筆頭が、桂二葉である。落語界の神田伯山と言っても良い。



落語家 桂二葉（ステッカー 提供）

桂二葉の落語は、一度聞いたら忘れられない、とにかく独特の世界観を持つ。「上方落語界の白木みのる」（これでわかるのは私の世代までだろう）と自ら紹介する中性的な甲高い声（不思議と全く気に障らない）と、訥々として聞こえるが実は丁寧に選ばれ発せられる言葉で枕が始まると、一気に独自の世界観・空気観の時間に引き込まれる。彼女は「大阪弁警察」とも呼ばれるほど綺麗で音楽的なコテコテの関西弁へのこだわりが強く、一時期『毎日新聞』に「勝手に大阪弁案内」という連載（現在は「やいやい言わせて」）を持っていたほどである。その正確な職人的なイントネーションと、留学生のためにネイティブ・スピーカーがわかりやすく話すような丁寧なスピード、呼吸と間が紡ぐ二葉の語り

は、音感と一語一語が一体化している。だから、一つ一つのセリフと共に、情感が心に沁み込んでくる。私は関西人でないからこそ、大阪という文化を丁寧に伝えてくれることを毎度感じて、二葉の口から出てくる一語一語を耳で追い、かみしめて聞いてしまう。顔はもちろん全身から二葉が全力で繰り出す感情丸出しのしぐさも、目を離せない魅力である。

彼女は声色を作らない。「どんな登場人物にも性別はあるけれども、私は甚兵衛さんでも『おっさんです!』という(年齢や性別を表す)氣いでやってない。“その人の気持ち”でしゃべってる」(水嶋領子編集『桂二葉本』京阪神エルマガジン社、2023、19)。「演じていても、自分の言葉として出すっていう感じやんね。だからとっても自然な落語になるんじゃないかと思うんやけど」(同77)。「まあ、ちょっとは変えるねんけど。どうしても二人でしゃべってたら、抑揚をつけないとあかんの。がーんと落とすんじゃない。例えば甚兵衛はんの方を落とすのでも、ちょっと落としたり、ちょっとゆっくりしゃべったりとか」(同80)。そこには、盟友春風亭一花が指摘するように、男女の言葉の落差が激しい江戸弁と違い、男女差があまりなくやわらかい大阪弁だからこそ、女性が古典落語を語っても自然に聞こえる(同81)という上方落語ならではのアドバンテージもある。そのため、二葉という人の可愛らしさは前提としてあるが、女性が男性仕様の落語を演っているということを聴衆はいつの間にか忘れてしまう(同28)。

二葉が落語で大事にしているのは、実在感である。だから、以前から二葉の中に住んでいる「アホ」「酔っ払い」「子供」を聞かせたら右に出る者はいないと言われる。二葉は高座で、上方落語の良いところは、今ならず炎上したり爪弾きにされたりするような人も包み込むような人にやさしいところ、そして汚い部分もとことんリアルに描くきれいごと

でないところであると語った。「天狗さし」で大まじめに鞍馬へ天狗取りに行く信じられないほど振り切ったアホ。「上爛屋」でちゃんと店のものをタダで食べ尽くそうとする酔っ払いのいかにも旨そうで憎めない食べっぷりと、それを許す店主の懐の深さ。他の演者の「上爛屋」を聞いた時には、ドケチが小商いの店主を騙して強引に無銭飲食する噺としてしか感じられず、いやな気分だけが残った。そして、「子はかすがい」で寅ちゃんを叱る母お花と父なしの寅ちゃんの切ない気持ち。二葉の真骨頂とも言える「佐々木裁き」では、たくましく凶抜けて賢い四郎ちゃんのかわいらしさ。すべての噺を、何度も何度も聞いてみたくなる。植木屋が屋敷で馳走になった酒肴を長屋で再現しようと女房おさきと奮闘する「青菜」(今のところ You Tube で聞けるのはこれだけ)も、高座でどんどんバージョンアップされている私の大好きな演目である。

二葉のリアルを追求する姿勢は、独演会の前に立寄ったカフェで出会った講談と落語を区別できないおばちゃん、新幹線でたまたま隣席になった長年憧れの大作詞家、落語界で世話になっている大御所にも容赦なく向けられ、高座の枕で披露される。昔からの夢だった人気番組「徹子の部屋」への出演が実現すると、嬉しさを隠しきれず、出演予定を口外することを禁じられているにもかかわらず、我慢できずに高座で現場のあれこれを報告してしまう正直さも、ほほえましい。

落語とジェンダー

戦後、講談も、GHQ による規制や漫才など他の演芸の隆盛などもあって振るわず、1960年代半ばから業界団体が分裂劇を繰返して衰退し、絶滅するのではとすら危ぶまれた。2011年には講談専門の本牧亭も閉鎖された。今も講談専門の寄席はない。講談界自体は、2000年代以降、一

龍齋貞水、神田松鯉が人間国宝となり、10年代以降松鯉の弟子の松之丞（六代目神田伯山）が奮闘したことが大きな起爆剤となって、空前の講談ブームが起こっている。こうした中、1979年に二代目神田山陽が神田陽子・紫・紅の三人を弟子に取るなど女性講談師を積極的に養成し、90年代には田辺一鶴が鶴英・一邑らを育てた。そうした結果、講談協会と日本講談協会に所属する講談師は現在男女同数で、特に女性に勢いがある（「サザエさんをさがして 講談」など）。

一方の落語も、長いこと女性落語家がいなかった。日本発のプロの落語家となった女性は、1974年に露の五郎兵衛に入門し翌年初舞台に立った露の都で、1995年初めて真打に昇進した女性は古今亭菊千代である。これだけ見ると講談とあまり変わりがないように見えるが、その後も落語界は男社会のままであり、女性落語家は増えなかった。桂二葉も、所属していた桂米朝事務所の動楽亭で2019年まで女性が高座に上がることを禁じられていたと述べ、こう語っている。

出番と出番の間に座布団をひっくり返す『高座返し』は前座の仕事なのですが、ある方から『女は座布団ひっくり返す仕事しかできひんやろ』って言われ、高座返しをやらされていました。しかも『女やから前掛けつけろ』って。

この仕打ちがよほど悔しかったとみえ、二葉は他の所でも何度もこのエピソードを語っている。そして2021年にNHK 新人落語大賞を女性で初めて、しかも審査員全員満点という圧倒的な評価で受賞した後、記者会見の最後の方で「ジジイども、見たかっていう気持ちです」と、本人としては「可愛い感じ」でつけ足した。この「ジジイども、見たか」はひとり歩きし、『ニューヨーク・タイムズ』にまで取り上げられた。

落語界の性差別はしかし、芸人や芸人修業の現場だけのことではなかった。桂米二に入門する前、寄席に通いつめた頃のことを、二葉はこう語っている。

女性の落語家さんが出てきたら、「ああ、女やな……」って思っていました。笑えへんかったんですよ。それで、何でこんなに笑われへんのやろ？って考えるようになりました。

女性の落語家さんの高座をよく見ると、落語をやっているときに、不自然やなって感じたんです。落語って、老若男女いろんな登場人物のセリフがありますよね。女性の落語家が男を演じると、その登場人物が「こんにちは！」というだけで、どこか無理してるように思えた。ほんなら、女の登場人物はだいじょうぶと思うじゃないですか。ところが女性が女を演じて、妙にわざとらしくなってしまうんです。

もともと男性が演じるためにつくられたもんやから、難しいんですけどね……。きっとその落語家さんの中に「〇〇らしくならないといけない」という気持ちがあったんでしょう。それが不自然で、痛々しくて、笑えなかったんです。

(JINS PARK「見上げた高座は“男の伝統”。噺家・桂二葉が化かして見せる『落語の世界』」<https://park.jins.com/series/mirunokaitakusya/03katsuraniyo/> 2025.8.14閲覧)

古典落語という器自体が、男性仕様であった。ライター堀井憲一郎によれば、講談は客観描写である「地語り」が基本で、もともとの語りにも性差がない。女性講談師の「口跡」(せりふまわし)が歯切れよく「言い立て」が「かっこよければ」、男性講談師と比べても何ら遜色はな

い。一方、落語の場合は、男と女が明確に演じ分けられ、どうしゃべれば老若男女、身分や属性がそれらしく見えるか、語り方や仕草が男性目線で工夫され伝えられてきている。その意味で、落語は俳優と同様、性差が商品化とつながっているのだという（堀井憲一郎「なぜ『女性の落語家』は少ないのに『女性の講談師』が多いの…？その『意外な理由』『現代メディア』2022.1.13 <https://gendai.media/articles/-/91377?imp=0> 2025.8.14閲覧）。おそらく、歌舞伎にも同様のことが言えるのだろう。

この難問を、二葉は「自然に演じる」ことで乗り越えてみせた。新作には決して手を出さず、古典落語のみを演じ続ける。「廓もの」を「女郎の立場からやってみたい」という女性落語家もあるが、二葉は「廓噺はやらないようにしている」という。自分の中に、自然に出てくる登場人物がないからだろう。女性落語家には男物の着物で高座に上がる人も多いが、二葉は修業時代から女物しか着ない。「自分に似合うか似合わないかだけ。骨格的に、どう考えても男物は似合わへんのでね」というのが、二葉の流儀である（「【国際女性デー】開拓者たちの肖像。落語家 桂二葉さん」『marie claire』2025.3.6 <https://marieclairejapon.com/lifestyle/225711/> 2025.8.14閲覧）。

桂二葉は、2024年3月9日の国際女性デー落語会「桂二葉独演会～落語の可能性～」に、ゲストとして社会学者の上野千鶴子を迎えた。その対談で上野が、「仔猫」に出てくる性差別的な表現について、現代的な観点から注釈を加えることを提案した。これに対して二葉は、「それは噺を一旦降りることになる。物語の空気を乱したくない」と答えたという（矢部義徳「演芸のまわり、うろちょろ」2024.3.9「立川談春独演会『お若伊之助』、そして国際女性デー落語会 桂二葉×上野千鶴子」<https://engei-yanbe.com/archives/7200> 2025.8.14閲覧）。自然に演じることを大事にする二葉からすれば、当然である。

二葉は「いつもまっすぐ、媚びずに落語をする。落語って楽しいし、平和やし、まっすぐやれば絶対よさをわかってもらえる。もちろん死ぬまでやる気です。点滴を引きずりながら舞台に出てきても、笑ってもらえる人でいたい」と語っている（『【国際女性デー】開拓者たちの肖像。落語家 桂二葉さん』）。二葉には、ずっと生意気で、どんな権威にも媚びずに、落語家としての志を貫いてほしい。

自然に生きるための話芸と学問へ

二葉の弟西井開は臨床心理士で、男性学を研究し『「非モテ」からはじめる男性学』（集英社新書、2021）の著書もある社会学者である。そして、立教大学社会デザイン研究科の特任准教授でもある。そのことに最近気づいた私は、この本を取り寄せて読んでみた。2025年度春学期に私は「ジェンダーと政治」という学部ゼミを開き、男性の生きづらさについてはトイアンナ『弱者1500万人時代』（扶桑社、2024）をテキストの一つとして読んだ。それもあって、西井のアカデミックな分析も、是非読みたいと思ったのである。

西井が当事者の一人としても参加していた「ぼくらの非モテ研究会」での様々な語りやその検討については、実際に読んで頂きたい。私が西井の著作に感銘を受けたのは、「非モテ」を、通り一遍の言説から作られた単線的な因果論に基づく一般化理論によって切り捨てるのではなく、個人の苦悩の奥底深くに潜む様々な男性をめぐる問題体系の総体として理解しようという、その誠実な姿勢である。検討する過程で西井は、「彼ら」という対象を「外」から分析・説明しようとするのが同時に、当事者である「私たち」という「内」から見ると、とてつもない権力性をはらむことに気づき、苦しみ、もがいた。被抑圧者としての女性学に敬意を払いつつも、物心ついてから生きづらさを感じて来た一人

の男性として、加害や過労を含む構造に男性視点から切り込もうという当事者アプローチは、自然な語りとして納得や共感を呼び得るのではないだろうか。

西井は姉について、「子供の時は人見知りで勉強もできずしんどい思いをしていた」と「情熱大陸」で証言した。姉弟は、全く違うフィールドで、幼い時からの「生きづらさ」にこだわり抜いて生きてきた。そして今、落語家と社会学者として、「女」「男」というより「一人の人間」として自然に生きることを表現する戦いを続けている。

一つの講談との出会いを起点として、この同じ時代に、過去と現在をつなぐ話芸や学問の分野で、日々、熱く志を追い求める挑戦が続けられていることを、私は知ることができた。その旅は、これからも続いていく。